

士曜視点

秋入学までの5カ月間、ボランティアなどの自主活動を合格者に義務付ける国際教養大学(秋田市)の「ギャップパイヤー入試」が、実施5回目を迎えた。より意欲ある学生の確保に向け、2012年

教養大 ギャップパイヤー入試

同大のギャップパイヤー入試は08年度スタート。秋入学前に自主的に活動すること、国際的な知識を身に付けたり、社会的経験を積んでもらうのが狙い。合格者は4月から8月にかけて、自身が立てた計画に基づき活動。9月1日の入学後に報告書を提出し、実績に応じ単位が与えられる。

一般社団法人・日本ギャップパイヤー推進機構協会(東京)の砂田代表理事は「国内外の幅広い活動を対象としている点や、活動を単位として認める点で、他大学のモデルになる」としている。

同大のギャップパイヤー出願者数は08年度11人(入学者数5人)、09年度32人(同12人)、10年度47人(同12人)、11年度77人(同13人)。

試験日が3月末だったことから、半数ほどが同大一般入試の不合格者だった。

12年度入試からは、より主体的な秋入学希望者を集めるため、日程を一般入試前の11月に早めた。同月12、13日の試験では46人が受験し10人が合格。同大入試室の中津将樹室長は「予想より受験者は多かった。今年

度入試からは従来3月末だった試験日を11月に前倒し。東大が秋入学とギャップパイヤー導入の検討を始めるなど全国的に関心が高まる中、教養大の制度は先進例として注目されている。

先進例に注目集まる 一般への浸透は不十分

が学すべき分野を明確にし授業に臨んでいる。

小林華さん(21)は3年、福岡市出身。福岡県内の大規模農家でフリーピン人研修員の寮に住み、2カ月間一緒に働いた。相手の国の視点で考える重要性を感じ、将来は経験を生かせる仕事をしたいと考えているという。

「ギャップパイヤーで入学した学生は、自分の方向性を見つけようとする意識が

強い」と同大キャリア開発センターの源島福己センター長。

厚生労働省の11年版労働経済白書は、卒業後も就職が決まっていない大学生は進路への明確な意思を持っていないケースが多いとし、ギャップパイヤー導入により早い時期から職業観を養うことが有効だと提言。

砂田代表理事は「日本人が国際的に活躍する上で、自



ギャップパイヤー

入学資格を得た学生に、社会的見聞を広めるため入学までの猶予期間を与える制度。イギリスなど英語圏の大学を中心に導入されており、学生は海外留学

やアルバイト、ボランティアといった活動を行う。教養大の入試では英語小論文と面接のほか、提出した活動計画書の内容で合否を判定する。

主活動を経験した人材の力は大きい。ギャップパイヤーを意識する学生は確実に増えるだろう」と話す。

しかし、全国的に見れば、ギャップパイヤーを導入している大学は少数。背景には、4月入学と新卒一括採用を基本とする社会構造などがあるとみられる。

同大担当者らも、ギャップパイヤーへの一般の理解は不十分と感じており、同入試を選択する理由が明確ではない受験生もいるという。

源島センター長は「単に入学時期をずらすだけでは無意味。自主活動期間をどう過ごすか、学生が自ら考え行動する力が問われる。社会の側にも、学生を支える姿勢や意識変化が求められる」と指摘する。



ギャップパイヤー入試の受験生らを対象に行われた小論文試験＝先月13日、秋田市の国際教養大

初回のギャップパイヤーで入学した学生が社会に出るのは来年度以降で、成果が注目される。ただ、大学だけで一層の制度浸透を図るのは難しい。企業や行政を含めた社会全体で、ギャップパイヤーを始め多様な大学の在り方を考える必要がある。(三浦ちひろ)